

想

随



カッタ・皆川泰蔵

科学の「道」

松本 仁 助

英語の「メソッド」、ドイツ語の「メトード」などの語は、ギリシア語の「メトドス」からきている。そしてこの「メトドス」という語は、本来「あるものに到達する道または過程」という意味である。したがって科学の本

質的な点とは、極端ないい方になるが、獲得された結果としての知識にあるのではなく、知識を獲得する「過程」すなわち研究し理解する「道」にあるといえる。

ところでこの科学の「道」とは、どういふものなのであろうか。それをあげると、一つは、分析、抽象するということである。これは、人工が加えられていない有機的な統一体を解体し、諸物が有する相互関係の曖昧さを除去し、伝統的な観念や感情を抹殺し、人間の迷夢をさますものといえる。だがこの分析、抽象は当然おそろしい破壊もするのであり、これがもたらした最大のものは、デモクリトスにはじまる原子論であらう。

二番目は、原因をもとめることである。この重要性については、おなじデモクリトスが、「ペルシア王国と王位を手にいれるよりも、原因の証明を一つでもみつけたすほうにわたしには価値がある」といっているぐらいである。ただこの場合の原因の証明とは、原始的な因果関係をみつけることではなく、「根本」原因を導きだすということである。したがってそれは、プラトンが論理的に一つ一つたどってひきだしたように、隙間のない

原因の連鎖のはてにでてくる客観的なものであり、「純粋な」原因といえる。

ところでこのように桎梏をとかれて活発な働きをするようになる悟性は、予測しがたい成功をもたらすが、一方では大きな呪いもかけるのである。つまり徹底的な分析、抽象とあくことのない根本原因の探究が、特殊なものにのみむけられるならば、科学が死滅するのである。

古代エジプトでは、身体の各部分や各種の病気をとりあつかう医者（サグ）の階級があった。これらの医者は、だれも身体を一つの全体としてとりあつかわなかった。眼の痛みを訴える者が医者のところへくれば、医者は、眼をなおすには、頭のみならず身体全体を治療しなければならぬ場合もあらう。だがエジプトの医者たちはそうしなかった。だからエジプトでは、医学は結局科学的には不可能だったのである。

しかしギリシア人の理性は、限定部分のみにおける分析、抽象のおそろしい結果を見越していた故、彼らは、身体の部分のみをとりあつかわず、身体全体を、いや身体に影響をあたえる自然環境とも関係させて「病氣の原

因」をつきとめ、より根本的な治療をするこ
とができたのである。それ故ギリシアの医者
は、自然科学者でもあった。

つまりギリシア人は、原因を個々のものと
全体との関連において探究しており、しかも
こうすることが、「純粋な」原因を獲得する
ことにもなるのである。だから科学の「道」
の三番目としてあげねばならないのは、全体を
みる眼をもつということになる。またこの綜
合力がなければ、分析、抽象のエネルギ―も
生かされないばかりか、「根本」原因も発見
されず、科学は成立しない。

以上のようにみてくれば、個々の場合にと
らわれ最初から実用的成果をねらうというよ
うなことをせず、全体との関連から分析、抽
象と論理的原因を追求することを尊重する
科学の純粋な「方法」が、実用的な技術より
も、実用面でもかえってまさっているとい
うことが理解できるだろう。

ところで、もし社会を一つの身体とみて、
かりに古代エジプトの医者のように部分のみ
をとりあつかう専門家のようなもののみが存
在するようになれば、社会は完全に分解され、
有機性を失い、人類が破滅してしまうという

ことは容易に想像できるだろう。知識でな
く、知識にいたる「道」のほうが如何に重要
であるか肝に命すべきである。

(文学部教授・ラテン語・ギリシヤ語)

人生――

「削り落す」といふ

と

「プロセス」の楽しみ――

杉 瀬 祐

木彫りと釣りは私の憂さ晴らしである。木
彫りといっても、その辺にころがっている廃
材を拾ってきて、面や人の立像や浮彫りを試
みる程度で、本格的な能面とか仏像を刻むよ
うなものではない。しかし一方、額縁とか鏡
枠の装飾のようなことはあまり好まない。私
の木彫りは人間臭いし、自分の怨念を彫り刻
むようなものである。それでも能面師が面を
うつというように、彫っていると単に形だけ
でなく、自分の心を打ち込み、自分の心が形
となっていく。気持の統一にはいいものだ

思う。それに木彫りは粘土細工などと違っ
て、一遍削り落してしまうと、あとでくつ
けるわけにはゆかない。それでも必要な線や
厚みは出来るだけ大胆無残に削り取らねばな
らない。極限まで削り落す、そこに木彫りの
品格がある。これは頭でも気持でもわかって
はいるのだが、実際には私などとてもそこま
でゆかない。腕とか技術とかいう問題はそこ
にあるのだろう。

卒業してゆかれる諸君が、自分の中の不要
なものを自ら削り落し、必要ぎりぎりの、即
ち本来の自己となって生きてゆかれるのが、
これからの人生であろう。それはそう簡単に
修得出来ることでもなく、容易に教えること
も出来ない。そのきびしさは、漫画ではない
が阿修羅のようであり、十字架上のイエスの
如くであろう。

さて、釣りも、最も原始的な楽しみで、釣
りを知らぬ人はあんな気の長いことはしてお
れないなどというが、実際には、釣人は気短
かな人が多く、静寂の中で怨念を燃やしてカ
ツカと魚と格闘しているのである。私は釣る
よりも、釣りに行くまでの空想を楽しむ。今
日の風で、この日和なら、どこに行けば、ど

の辺に魚はうようよしている、それをジャカスカ釣るには、どんな餌でどんな仕掛けで……と取らぬ狸の皮算用もいいところである。

ある早春、傷心を抱いてふらりと旅に出た。

京都駅にゆくと近鉄特急発車二分前、忽ち意を決して寒グレの九鬼をめざす。松阪で紀勢線鈍行に乗換えてやっと旅に出た落着きを取戻す。トンネル多く乗客少なく、のびのびと鈍行は行く、枋原を過ぎるとかなり急な勾配。佐里駅あたりなど、オットットト、スットンといったような恰好で汽車がとまる。土地の人の会話は面白い。「あの静子さんな、近くの医者の子宮癌やていわれて松阪の医者にかかったら、すぐ親戚の者みんな集めえていわれてな、これ子宮癌や、助かりたい思うなら早く手術せにゃいかんていわれたんやて。なにもすぐ親戚の者集めんでもよからうに。それで京都の医者に診て貰うたんやて。そして静子さんな、腰がだるうてだるうて困ったんで診て貰うたんやて。癌にかかったらもうあかん。静子さんな、初めは恥ずかしがつて診て貰いたがらんだったが、とうとう我慢で

けんようになって診てもうたら子宮癌だったんやて。われがこどもいぢいち遠慮なんかしたら駄目わさ。この年になって恥ずかしいもあるかよ……」話をしているのは四十年前配の漁村の女房風の数人。私の一つ前の席には若い漁村の人妻のような女が老婆と一緒に坐り、その向かい側―私の方からは背もたれの上の後頭部しか見えない―には少し都会風の若い女。彼らは連れではない。しかし女同志なので仲良く話合っている様子。赤い毛糸の羽織をきた若女房は、通路向こうの声高な中年女の噂話は聴いているらしく、子宮の話をでるたびに、その頬には一瞬恥じらいが走る。それでも熱心に老婆の話相手になっている。何かものをいって相手の顔を見、その反応をたしかめてちょっとかすかに目で笑いうなずく表情が素朴で可愛い。私の席からは彼女の表情だけしか見えぬ。おだやかな満ちたりた表情に、ひよっとしたらおめでたかなと思う。あとで、彼女が通路を通りすぎるとき、やはり私の感に当たっていたと思った。

紀伊長島をすぎて、ようやく海が見える。展けた海に春はすでに来ている。旅に出ると、同じ場所を春に訪ね、秋に訪

ねて、趣きがそれぞれに違うのが楽しい。釣りの旅は一層その感がふかい。私たちの人生の旅もそうした味わいを持ちたいと思う。

九鬼の初めての宿も素朴で一人旅の旅愁。そしてグレやマス（マハタ）やハゲを百ほども釣った。
（女子大学教授・聖書）

生命の燃焼

土居 真俊

わたしは、低血圧のせいかな、大の寒がりです。毎年冬になると、暖房設備で苦勞をする。数年まえのこと、アメリカ製とかいう石油ストーブを取り寄せて書齋に据えつけてみたが、これが大変な代物で、ボンボン燃やしている間に、黒煙が立ちのぼって、クロス張りの天井がまっ黒になってしまった。いうまでもなく、これは石油の不完全燃焼によるもので、ストーブの円筒内に入ってくる酸素の量が足

りなかったのである。

われわれの人生にも、多かれ、少なかれ、この不完全燃焼ということがある。われわれ人間のひとりひとりとは、いわば、石油ストーブの燈心のようなもので、火を点すれば燃える存在であり、みんなが燃えたがっているのである。人間にとってもっとも幸せなことが、自分の存在の底から情熱を燃え立たせることのできるような仕事を見出すことであり、その仕事に自己の全存在をかけることによって、自己の生命を燃焼し尽すことではないであらうか。

さて、石油ストーブが完全燃焼をするには三つの条件がある。まず第一は燈心そのものが良質で、石油を適度に吸い上げること、第二には石油が純良であること、第三にはストーブの円筒内に、燈心が吸い上げた石油を完全に燃焼させるに十分な酸素が供給されること、つまり空気の流通がよいことである。

われわれの人生についても、同じことがいえる。われわれの生命が完全燃焼を遂げ、われわれの存在の意味が十分に発揮されるためには、何といっても、自分自身の素質が重要である。われわれ自身の中に、火を点すれば

燃え上がり、燃え続け、周囲を温めていくだけの可能性が秘められていなければならない。特に静かに燃え続ける持続性が大切である。第二には、われわれの働く動機が、純良な石油のように、純粹でなければならぬ。いくら頭の回転がよくても、その働く動機が不純であれば、そこから立ち上る炎は黒煙を交え、周囲に煤煙を撒きちらすだけである。新島先生が「良心を手腕に運用する」といわれたのはその点である。第三に必要なのは十分な酸素、つまり環境に恵まれるということである。いくらよい素質をもっている、また動機が純粹であっても、環境に恵まれなければ、その才能を十分に発揮し、自己の存在の意味を十分に実現することはできないであらう。しかし、人間は単に環境によって支配されているだけではなく、また幾分か自己と環境とを創り直す自由をも与えられているのである。単に自分たちだけに都合のよいような環境を温存したり、創り出したりしようとするのではなく、すべての人が自己の生命を燃焼し尽し、すべての人が自己の存在の意味を十分に実現し尽くすことのできるような「自由の広場」を創り出す共同作業が必要である。

しかし、現実の社会では、この三つの条件が完全に備わり、自己の生命の完全な燃焼を経験するという人は極めて稀であらう。人は誰でも、自分の内にも外にも、多かれ少なかれ、何らかの欠点や障害をもち、したがって、不完全燃焼の悲しみをもちつつ、舞台を去らなければならないのではあるまいか。

しかし、それにもかかわらず、この石油ストーブからの教訓は大きい。

(神学部教授・組織神学(1))

倉敷のこと

金 田 民 夫

先日、久しぶりに倉敷を訪ねた。今度新しく開館した東洋館のコレクションをみるのが主な目的であった。北魏や唐の時代の石仏のすばらしい作品が、少数ではあるけれども展示されており、さすがはと感服させられた。

東洋館は、数年前に出来た棟方志功館や河井寛次郎、富本憲吉らの陶器を展示する部屋部屋がつながって、大原美術館の別館になっている。本館の見馴れた西洋近代絵画の展示も覗いてみた。あの忌しい盗難事件の直後だけに、制服の警官が出入りしている。かつて銀色の神秘な光はなっていた、ギュスタヴ・モローの「雅歌」は、もうみる事ができなかった。セガンティーニの明るい「アルプスの真昼」の前にきたとき、私はこの絵の存在に再会の喜びを見出すとともに、何だか救われたような、不思議な感慨が湧き起こって来るのを覚えた。モローの「雅歌」が、おそらく彼の一生涯における最高の傑作のうちに数えられるとすれば、セガンティーニの「アルプスの真昼」は、寡作な画家だけに、世界的にも貴重な作品だからである。もちろんエル・グレコも、ゴッガンも、ピサロも、大原美術館のコレクションはすばらしいものである。

しかし、少なくとも、他に類のない作品を、われわれの眼と心から奪い去るような行為は、どうしても許すことができない。世界の人類と文化に対する最大の冒瀆だといわなければならない。

美術館の中で味わった悲しみも、あるいは現代の世相の反映なのかと思いがち、外に出ると、昔ながらの倉敷の町が私の心を慰めてくれる。倉敷には、学生の頃から美術館をみるために、もう何度か足を運んだ。丁度七年前のこと、たまたま倉敷に私のところの卒業生がいたので、宿屋を依頼して紹介されたのが、今私の常宿になっている「旅館くらしき」である。この旅館は、考古館の隣りにあって、大原美術館や民芸館といった建物が、昔からの堀川の両側に散在するあたり、すなわち白壁の土蔵が立ち並んだ、独特の風情をみせる町の一角に、静かなたたずまいを示している。二百五十年前の土蔵の家を、構造はそのままだ、大きな棟木や梁を露わに生かして、内部をいかにも素朴にしつらえ、民芸風の調度をととのえた、さすがに倉敷の町ならではの造りである。それは全くの偶然であった。知らずに紹介されたわけであるが、旅館の娘さんが同志社大学の美学専攻の学生だということ、生粋の倉敷っ子の美しい母親とも親しくなった。知性とセンスに溢れた、かつては倉敷小町と騒がれたであろうような、仲々の美人である。その後、ゼミ旅行で倉敷

を訪れた時も、少々無理をいってお世話になった。その頃娘さんがフランスに留学したいという話があって、ゼミの学生を放って置いて相談に乗ったこともあった。倉敷の郷土に咲き、倉敷の風土の中に育った、そんな感じの女主人であり、また旅館である。

戦前の長崎の町も、私の好きどころであった。鎌倉の滑川のあたりに、歴史の匂いを感じられたものであった。現代は、町も人間も、何だか根なし草のように、類型化し、観念化して行くような気がしてならない。倉敷のこの古い町の風情も、美術館の新しい蒐集とともに、世界的な郷土性を保ちつづけて欲しいものだと思う。

(文学部教授・美学概論)

ほんものの味

有賀のゆり

お正月にお菓子屋さんの御主人の訪問をうけた。おみやげの和菓子は、実にコクのある近年味わたったこともない、いい味のものであった。私達の感嘆の辞に対してこの方は、「私の方のお菓子は昔と同じ様に作っているのですよ。他のお菓子の味が落ちていくのです。」といわれるのである。つまり最近は大抵のお菓子屋で、香料、色づけ、防腐材など様々な交ぜものをする。それが味を落す第一の原因、第二はアンコとお砂糖は出来るだけ練らない方がおいしいのに、大抵機械を使って、すさまじい勢で練りあげるためである。その根本原因は、純粹な和菓子の味を出すことより、むしろ大量に作って大きな利潤をあげるこの方が主眼になっているからだというのであった。

数年前に、この御主人ももう少しで製造を機械化するところであった。申し出先がお得意先だったので断りにくく、非常に困った。しかし迷いに迷ったあぐく、やはり店の味を落すことは出来ない、と、丁重にお断りしてしまった。もしその時機械を取りつけていたら、私は今の何十倍かの金持になっていたでしょう、と御主人は笑われる。息子さんが反

対では、という問いに対して「いえ、息子は私に更に輪をかけたようなものでして、一番辛い仕事を卒先してやってくれています。アンコとお砂糖を大きな鍋で煮ながら、底が焦げつかないように大きなしゃ文字で返して行くのですが、これがとても力のいる仕事で大変なのです。」とのことであった。店の人達も一度来たものは殆んど居着いてくれている。二十年以上になる人もいる、と談々と話される老紳士と対座していて、私は心の洗われる気持であった。

二、三日たって、また、ほかの方からお菓子をいただいた。開けてみるとお正月のためであろう、先のお菓子と全く同じ色、形のものが入っている。うれしくなって一寸口に入れた途端、しまった、と思った。まずい!! 下さった方には申し訳ないが、まるで粘土の様なのだ。ほんものの味とはこんなに恐ろしいものだと思わされたのである。

現代の機械化され企業化された時代では、量と量がもたらす利益が重視され、質はあまり問題にされない。そのために自分の芸術的または技術的良心と、所属する企業体との間にあって苦しんでいる人を私は何人か知って

いる。しかし悩みながらも信念をもってほんものの味を貫こうとしている人はまことに貴重である。

同志社も大きくなった。最近「名門校」という声をよく聞くが、果して味は落ちていないだろうか、もし同志社とはレッテルばかりで、中味はこの学校とも変らない規格製品を生みだしているのなら立学の意味はない。専門の分野において、また人間として、ほんものの味を持った若い人々を世に送り出して行くのが同志社の負うべき社会的責任ではないのか。そのためには、まず教職員がほんものの味を追求して行かねば、と思うことである。
(女子大学教授・鍵盤音楽)

スポーツと根性

渡辺博之

根性とは何かと考えてみた。根性という言葉

葉は性質とか氣立てを意味するが、スポーツでいう根性とは、もつと奥深いもので、禅のだいご味とでもいおうか、いわくいい難く、身近なものであるようで疎遠なもの、誰でも持っているようでいて、これが根性だと人にみせられないもの、時に応じて現われては引込むもの、それを表現することがむずかしいものであることに気がつく。

運動部の監督の会合でも、よく根性についての話しあいながされるが、監督の多くは、どうもうちのクラブにはガメツサ・根性がない、どうすれば根性ができるか。からだも立派、練習も人一倍、技倆というか技術も秀れている。フォアザチーム、チームプレイにも徹している。それでいてさてという時に頑張りがない。勝てない。学園の雰囲気か、学生の育ちか。

私はガメツサと根性とは言葉の表現が違うように同じようではないとおもう。貧しさ苦しさに打ち勝って鍛えあげてきた節くれだった体格、眼光の鋭いひき締った顔立ち、一つ間違うと挺子でも動かない豪傑肌の選手を集めても、それが競技において、絶対に勝つとはいえない、表面だけのガメツサ、土性

骨だけでは一向に役にたたない。ある監督の根性観は、根性の本質は簡単には説明しにくい、が、激しいトレーニングをかさね、とことん技術を磨きあげると、変化するゲームの流れにに応じて、いつでもその持てる技倆を発揮できる。いつもゲームの展開を見通して、それに対応できる知恵が根性に通じると説明した。なるほどとおもう。この説明をもつと具体的に根性を必要とする人、チャンスに戦勝方程式の答をだせない人に会得させたいわけである。

努力型の人が、壁にぶちあたって、長い間暗中模索して何かをつかむと、このつかんだものが根性の球根となる。仁王さんは、仏法を守護する金剛不壊の力の持ち主といわれるが、その金剛力もこうして生まれたのではない、それが根性の毛根だとおもう。

根性というのは不動心ということに通じるのではない。

いろいろな困難、恐怖にであつた時に、動じない心、弱敵や強敵に対しても、その相手にあわせてプレイしない心構え、常に自分自身をみつめて、忠実にプレイできる人は、根性の素質ある人だとおもう。このような人は

ここ一発という時に、信じられないような力や技術を発揮することがある。私はこういう時にこそ根性という言葉を使いたい。どんな場合においても自分の限界に挑戦する気魄を持って臨むべきだとおもう。

スポーツマンシップを遺憾なく発揮された時のすがすがしさは最高のものであろう。

スポーツ紙は、根性の不足という言葉をよく使う。スポーツマンは多かれ少なかれ、なんらかの根性を持っているものである。それがでなかったか、だせなかったことで敗戦につながった時に、その結果として、やる気がない、根性がないといわれる、下馬評で優位に立つチームが負けると、根性不足として簡単に片付けてしまうのである。

根性がないといわれる原因は必ずあるとおもう。だから私も根性とは何かと考えてみたわけであるが、それはスポーツマンが永久に模索追求しつづけていかねばならぬものである。

(工学部助教授・スポーツ概論・体育実技)